

上総地方の石造物探訪

藤由美

十一月九日(日)バスを使つての現地研修「上総地方の石造物探訪」に参加しました。

天気予報は雨、朝は小雨がパラつき、傘を持つて家を出ましたが、幸い集合場所の千葉駅に着くころには雨もやみ、終日、暖かな薄曇りで、石造物見学には恰好の日になりました。

参加者は一九名。芝山町く匝瑳市く山武市く東金市く九十九里町の十一か所、十数基以上の珍しい石造物を早川正司副会长、川戸彰顧問、玉井ゆかりさん、小西則子さんのご案内で見て回り、東総地域の石造物の面白さを再認識しました。

①芝山仁王尊の蛇紋岩製石灯籠と西国三十三番観音像群など

ほぼ満席のマイクロバスは、芝山町の観音教寺仁王尊へ。本堂前の天保十五年銘の石灯籠は、水戸大里村の照山作右衛門敬遠が願主で、水戸藩が門外不出の「御留め石」していた珍しい蛇紋岩製でした。

本紙一二〇号の石田年子さんの報告によれば、東庄町の手水石と旧山田町観福寺の石灯籠も、常陸太田の蛇紋岩「町屋石」製で、奉納者や石工銘は水戸に絡むとのことでした。



本堂前の大正八年造立の西国三十三番観音像群も壮観。その向い側には「芝山仁王尊道」道標があります。台座の「和國屋」の銘は、八千代市立郷土博物館にある「なりたミち」道標にもあり、品川宿和國屋が「社会貢献」と宣伝を兼ねて建てたものでしょう。

本堂の右手奥へ進むと、字彫りの名工「宮亀年」銘のある石碑や、「秩父第一番」銘の如意輪観音、「坂東第一番」銘の十一面観音の石仏があり、さらに奥は江戸時代前期の墓石や墓標仏が並び、中には玉井さんが注目されている銚子砂岩の家型墓や多重塔もあって、興味深い墓地でした。

②殿部田の東昌寺墓地の家型墓、十九夜塔、境内の馬頭観音塔など

東昌寺墓地の整備された無縁塚には、手前に江戸前期の十九夜塔や大日如来立像の石仏、奥に新しい観音立像、その両脇に墓標仏や墓石、そして家型墓が六基きれいに並べられてあり、そのうちの一基は、天地が逆ですが、元和九年の銘と四十九院の線刻がありました。

家型墓については、先月の石仏入門講座で勉強したばかりですが、現地で玉井さんの説明をお聴きし、その特徴などがよくわかりました。



そのほか、東昌寺境内には、明和九年と安永四年の馬頭観音立像塔や万延二年の馬乗り馬頭観音塔、宝暦十年の青面金剛立像の庚申塔、寛政九年の普門品等読誦供養の宝篋印塔など見どころがいっぱいでしたが、まだまだ先があるので、早々にバスに戻り、殿部田を後にしました。

③ 匠瑳市中台の建長五年銘地藏線刻板碑
匠瑳市に入り県道一〇六号線沿いの中台加持堂で、『続房総の石仏百選』に掲載され、千葉県有形文化財に指定されている「中台板石塔婆（建長五年在銘）」を川戸彰先生の解説で見学しました。



川勝政太郎氏が『日本石造美術辞典』（一九七八）の「加持堂線刻地藏石仏」で鎌倉時代の様式を示す地藏像とし、清

水長明氏が『下総板碑』（一九八四）では、南北朝時代以後の造立で年銘は後刻の可能性ありと指摘している諸説ある石塔です。お堂の格子戸越しに覗き込み、カメラで撮影したりして、その像容と背面の銘文などを観察しました。

④ 匠瑳市大浦路傍の庚申塔
県道一〇六号線沿いの大浦の、元文二年銘の笠付角柱型庚申塔。口を開いた珍しい青面金剛、足元の鬼と三猿、二童子もユニークで躍動的な造形。さらに笠の破風には、馬を引く鬼と妙見像に似た武人像刻まれています。どんな物語があるのでしょうか。



この塔の周りには、飯岡石に「庚申」と刻まれた枕のような丸石がたくさん積まれてあり、これらは「百庚申」なのだそうです。

また、この近くの辻には馬乗り馬頭観音や大正七年の道標もあり、楽しいところでした。

⑤ 匠瑳市山桑医王寺墓地の閻魔王像
大きく口を開け、裁きを下す迫力満点の等身大の閻魔様。正徳二年念仏講造立で、怖いけど、ちよつとユーモラスな親しみやすい風貌でした。なお、この墓地にも多層の家型墓がありました。



⑥ 山武市柴原蓮光院の仁王像
水田の中に現れた穴だらけの岩肌に灌木が茂った塚のような岩塊は、金剛地層という砂岩層が露出した奇岩だそうです。旧成東町指定の文化財になっています。

その砂岩を用いたと思われる仁王像が、すぐそばの朽ちてしまいうような山門内に安置されていました。『房総の石仏』二四

号に小西則子さんが報告されている柴原蓮光院の仁王像で、阿形は両手を腰にし、足をコンクリートに埋められて立ち、お顔が溶けかけている卍形は、握った拳を振り上げたポーズ。岩質がもろいのでだいぶ傷んでいます。房総では八例ある石造仁王像のうちの貴重な一対だそうです。



⑦山武市真行寺古墳群内の謎の石像

古代武射郡の郡寺跡奥の山林内にある真行寺古墳群に分け入ると、方墳の第六号墳裾部に、丸顔に高い鼻の面影が彫ら

れた1m位の石像があります。石材は、柴原の仁王像と同じ、金剛地層の砂岩。



昨年入手した濱名徳順師の『論集 幻の廢寺 真行寺』では、「石仏ではなく石人と呼ぶべき」で、造られたのは「平安後期〜中世の可能性」と推論している謎の石像です。

今回現地では、『房総の石仏』二四号にこの石像についての新説を書かれた川戸先生に、詳しくその内容をお話しいただきました。川戸先生の説では、この方墳は大日塚で、石像は、寛永期の湯殿山信仰にかかわる石仏とのこと。つくば市には、顔は長四角だが、目鼻の特徴がこれによく似た大日如来の石仏があり、茨城県南部経由で房総にもたらされた湯殿山修験によってつくられた行者彫りではないかとのことでした。

⑧成東元倡寺の九重塔と板碑型墓塔

旧成東町指定の元倡寺九重の塔は、旗本の野村彦太夫の供養塔で、高さ約4m、慶安二年銘があり、最下層の塔身内には小五輪塔が入っていました。構造から、利根川下流域と東総に多い家型墓の系統で、その最高級のものと言えるようです。



境内奥には、高さ約2mの野村彦太夫の板碑型墓塔があり、早川さんの説明では、寛永十年に東金城で死去したことや生国のこと、台徳院殿に代官を仰せつけられたことなどの重要な情報が刻まれているとのこと。

⑨東金市松之郷願成就寺の特殊五輪塔

十年まえに桃崎祐輔氏の論文で、丁寧に荘厳された鎌倉時代の供養塔と知り、訪ねたことがあります。

今回訪ねてみると、三基の五輪塔は、境内の片隅の草むらから本堂前に移され、

覆い屋が建築中でした。早坂さんが『続房総の石仏百選』で紹介されている五輪塔で、白色凝灰岩に梵字と精密な装飾が彫刻された造りは他に類がなく、北条長時の建立と推定されるすばらしい石塔です。



⑩松之郷八坂神社の牛像（神使）



願成就寺の裏の坂を上った八坂神社には、狛犬ならぬ牛像一対が社殿前で神社を守護していました。

寛保三年寄進の神使牛像で、八坂の神は、牛に乗って出雲に下った素戔嗚尊、そして仏教と習合した祇園精舎の守護神の牛頭天王。牛は八坂神社の神使なのでした。

⑪九十九里町粟生善福寺の仁王像

最後の見学地の善福寺に着いたのは、日が沈んだ午後五時少し前。

『房総の石仏百選』に、「筋肉隆々」で「造形的にすばらしい」と町田茂氏が書いておられる仁王像は、ちょうど本堂再建工事で撤去中。ご住職のご厚意によりブルーシートを剥いで、ライトを当てて、横たわった姿の仁王像を拝観しました。

この仁王像については、宝暦六年に飯高十兵衛が寄進した際、宮免収益金を一部資金にしていたことから村人から銘文にクレームがつき、「宝暦十歳庚辰改」惣氏子「助力 願主飯高氏」と現状の銘に刻み直したということが、飯高家文書でわかるそうです。



すっかり暗くなった中、バスに乗り込み、九十九里町を後にしました。

今回の旅は、早川副会長の用意周到な計画と丁寧な説明で、上総・東総の石造物の最新の知見を知ることができ、また川戸先生、玉井さん、小西さんの解説もわかりやすく、たいへん充実した研修となりました。早川さんほか、ご尽力いただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。